

清澄庭園

◇江戸時代

深川清澄一帯に 紀伊国屋文左衛門 伝聞がある 文左衛門は紀州湯浅の生まれ 20代に紀州みかんや塩鮭で富を築き 元禄年間に江戸で柳澤吉保などに賄賂を贈り接近 上野寛永寺根本中堂造営で巨利を博したが後 十文銭の鑄造事業に失敗 綱吉の死により失脚した 晩年は浅草寺内で過ごした後 深川八幡に移り宝井其角らと交友が有った俳号「千山」と号する享保19年(1734)に死去享年66歳と言われている

文左衛門の別荘が清澄にあったとする説があり深川一帯の文左衛門伝説であるが別荘存在の真偽は判らない
下総関宿城址と現在の城遠望

江戸時代後期には清澄庭園のあるこの一帯は伊勢崎町と呼ばれ 久世大和守 の領地である久世家は徳川家に隨身する参河譜代の由緒ある家柄で寛永13年1636 久世広之が大和守に叙され下総国関宿/千葉県野田市を賜り居城としていた久世家の上屋敷は常磐橋御門内に中屋敷は箱崎町にあり下屋敷はこの深川伊勢崎町にあった 幕末には当主久世広周は老中として徳川幕府の中枢にいたしかし維新の頃は久世家は所領を離れこの下屋敷も将軍に返上した明治4年の東京大絵図には新三位中将即ち 徳川慶喜の所有となり 明治9年の絵図では前島密四条隆譚などの名も見える 維新動乱の余波をうけこの土地は転々と人手に渡っていたことになる

◇岩崎時代

岩崎彌太郎 明治11年 岩崎彌太郎は 伊勢崎町一帯を購入した 彌太郎言として次の言葉が残されている「吾は性来これといふ嗜好なけれど 常に心を泉石丘壑に寄すこれを以って憂悶を感ずる時は 名庭園を見る 向島の佐竹の庭の如きは名苑なれども 唯人為の工のみにして天然の妙趣なし ひとり加賀邸の庭園 (現東大 三四郎池周辺) は無数の巨巖大石を配置し老樹點綴して豪宕の趣深山の風致あり若し吾に庭園を造る時あればかくの如きものに倣はんと欲す」明治13年 彌太郎は「深川親睦園」として 庭園整備に乗り出すしかし志半ばにして 明治18年湯島岩崎邸にて逝去 享年50歳死因は胃癌だった。

岩崎彌之助 岩崎彌太郎の遺言を基に弟 彌之助が庭園整備を続行した彌太郎理想の大名庭園を目標に茶人磯谷宗庸を招き池泉回遊式 潮入庭園として明治24年に「清澄庭園」 を完成した 庭園面積約3万坪である庭園付属の施設として西側に英人 ジョサイア・コンドル設計の洋館 (762坪) を作った 東側に当時きっての名工匠 柏木貨一郎による和館 (315坪) を作り岩崎彌之助深川別邸とし 三菱社の迎賓館として使用されていた両建物とも明治・大正時代を通して屈指の名建築で何れも国宝級と言われる 大正12年の 関東大震災でこの何れも灰燼と化してしまった 巻末に年表を付す

岩崎久彌 岩崎彌太郎の嫡男 久彌は彌之助を引き継ぎ庭園を運営する 明治42年日本陸軍の大演習視察及び伊藤博文国葬の為に来日した 英国インド軍総司令官キッチナー元帥を接遇する目的で庭園内に 涼亭 を作った 設計は保岡勝也で大震災にも残り優雅な姿を今も止めている大震災で壊滅的な被害を被った東京市は 多大の人命救助に有効であったこの清澄庭園の贈与を申し出ると 久彌は快諾し大正13年に東京市に寄贈された 東京市はこの寄贈に答え整備後 昭和7年 東京市清澄庭園として開園した

◇ 関東大震災前の清澄庭園

園

